

自分が知らない未知の世界へ。
いつまでも挑戦を続けたい



勉強のためによく訪れていたという
中央図書館で

大学院(左)と
エクステンションセンター(右)の修了証書

学ぶ人
川田 節子さん
(1993年入会)
受講内容 「原文で楽しむドイツ文学20講」
「ドイツ語中級IA」など

川田さんの 学びの履歴書

- 受講科目例 (一部)
- 1993 「英会話上級W-B」
- 1995 「英語会話上級B」「英語で学ぶ日本美術と文化」
- 1997 「TODAY'S NEWS W」
- 1998 「英語会話上級S-A」
- 1999 「ドイツ語初級」
- 2000 「原書で読むドイツ名作選」「アイルランド文学」「リーディング集中-ハリー・ポッターと賢者の石を読む-(中級)」
- 2001 「ドイツ文学は面白いのか?-原文で楽しむドイツ文学20講-」
- 2004 「TOEIC テスト準備コース-860点を目指してA-」
- 2005 「ドイツ語中級」
- 2008 「現代イギリスの女性作家を読む-アイリス・マードック-」
- 2010 「初心者のための卓球教室」「ドイツ語中級IA」

これまでとまったく違うこと、新しいことを勉強してみたかった」川田さんは自分がエクステンションセンターに通い始めた理由をそのように語ります。当時は都立高校で保健体育の教諭をしていたため、定年退職までの数年間は週に1日、勤務後に一度自宅に帰ってから授業を受けにきていました。特に集中して学んだのは英語。

「高校、大学と英語の授業が一番好きでした。そして小説を読むことにも興味があったので英文学を勉強することを決めました」

定年退職後、勉強を続ける川田さんに新たな目標が生まれました。その目標とは大学院に入って勉強すること。

「大学院に行きたいという気持ちが

だんだんと強くなっていったんです。ただ、私が入りたかった専攻には社会人入学の枠はありませんでした。若い受験生と同じ条件で受験をしていたので、何度も落ちてしまっただけ、とても大変でした」と川田さんは苦労を重ねた当時を振り返ります。

ドイツ語を始めたのはちょうどこの時期でした。入試科目の第二外国語として必要だったのです。思い切って初級講座に申し込んでみたものの、昔、大学の一般教養で習った以外勉強したことのないドイツ語に悪戦苦闘。現役生に交じって、大学の中央図書館で必死に試験勉強を続け、3度目の受験でようやく大学院に合格したときは本当に嬉しかったです。

「せっかく覚えたドイツ語を無駄にするのはもったいないと思っただけ、その後も勉強は続いています。荒井先生の講座は、テキスト以外にもドイツの歴史、文化、風俗習慣などさまざまな話題を扱うのでとても勉強になりますね。受講生にはドイツに赴任していた方なども多くレベルが高いため授業についていくのは大変ですが、元々自分ができることに挑戦するのは好きですから。最近では卓球なども始めましたよ」

早稲田大学のエクステンションセンターの魅力は、講師と生徒が素晴らしいことに尽きるという川田さん。これから先も一歩一歩、地道に勉強を続けていきたいと語ります。

「他の語学学校に通ったこともあるのですが、長く通っているのはエクステンションセンターだけです。実は自宅は高台にあって、勉強部屋の窓から早稲田大学が見えるんです。大学を眺める度に勉強したいという気持ち湧いてくる。私が学ぶべき場所はここなのだと思えます。これから先も、ずっと通い続けたいですね」

ちのかいたく

知の 開拓

ひとつの「学び」から得た発見が、

知の世界を広げてくれる出発点となります。

どのように学びを広げていくか、教える人と学ぶ人、それぞれの学門分野について
学びの出発点とこれまでをお聞きし、そのヒントを探してみました。

生き難さが出発点だった。
答えがないから学び続ける



授業は毎回、多くの質問が飛び交い、
活気にあふれています

多様な受講生全員の顔を思い浮かべて
講義の準備をするという荒井先生

教える人
荒井 訓先生
講義内容 「ドイツ語中級IA」など

ドイツ語を選んだのは、何となく「なんですよ」と荒井先生は飄々と話します。

「あえて理由をつけるなら、自分の肌合と感じたことでしょうか。私は学園紛争の少し後に高校に入った世代です。既成概念が崩壊して価値観が多様化した時代、私は何を根拠に物事を考え、判断すればいいのか迷っていました。そんなときにドイツの思想家たちの著書を読んで(ほとんど理解できませんでしたが)、自分の考え方の「芯」を作るものが含まれていると漠然と感じたのです。そこで大学では、独文へ進むことを決めました」

その後、大学院へと進み、18世紀から19世紀のドイツロマン主義を専攻。長く在籍した大学院を修了して東北大学教養部に勤務します。

「学生時代は抽象的なテキストの解釈

に明け暮れていましたが、東北大学で大学行政に追われました。当時、国立大学は改組の渦中にあり、研究活動に関しても、社会的ニーズというようなことが盛んに言われ、多くの大学で「文学科」がなくなったり、看板を替えたりしました。東北大学在任中、私は3年近くケルン日本文化会館に出勤しました。国の文化交流事業の現場で大学教育や研究を別の角度から見る機会に恵まれ、その頃から「具体的な事象から抽象へ」という視点を持つようになりました」

長く研究を続けてきた立場から、ドイツの魅力は歴史の中で培われた文化の厚みだと荒井先生は言います。「ドイツはとにかく思想が徹底している。曖昧さを残さず、徹底的に考え抜かれた深みには学ぶべきところがあると思います」

荒井先生の講義ではテキストは話題の材料に過ぎません。それは掲載された単語から縦横無尽に話題を広げていくからです。「エクステンションセンターの受講生はさまざまな方がいます。これまでのキャリアも違えば興味、関心も違う。だから旅行で使えるフレーズから、一つの出来事に対するヨーロッパ各国の反応まで、幅広い話題を取り扱いたいです」そう話す荒井先生に、最後の質問として学び続ける意味をお伺いしました。

「高校生のときに感じた生き難さ。それは、何歳になっても変わることはありません。生き難さがあるから私は学び続けるのだと思います。学んだからといって生き難さが解消されるわけではないのですが、少しでもしっかりと考えられるようになるために、学ばずにはられないのです」

プロフィール

1954年生まれ。早稲田大学大学院修了。早稲田大学商学大学院教授。専門分野はドイツ文学および文化。主な著書として、『戦時下日本のドイツ人たち』(共著・集英社新書)、『はじめてのドイツ語会話』(ナツメ社)

荒井先生の 学びの提言

おすすめ図書
~私の本棚から~



『寝ながら学べる構造主義』
内田樹著
文春新書 定価 725円

現代思想に大きな影響を与えた知の巨人たちは、そもそも何を言おうとしたのか。誰にでも分かる語り口で説いた書。



『流線形シンドローム』
速度と身体の大衆文化誌
原克著
紀伊國屋書店 定価 2,520円

物理学用語「流線形」。科学的な概念が一般に普及する過程で、ときに非科学的な神話を作り出してしまふことを説く。